（報告書）

南米南部メルコスール地域におけるマテ茶産業の現在
- ウルグアイにおけるブラジル産マテ茶の輸入・流通・消費の実態に関する研究 -

中沢　知史（立命館大学）

1. 研究目的

1-1. はじめに

2022年のサッカー・ワールドカップ・カタール大会は南米アルゼンチンの優勝に終わり、大会カップがL.メッシ（Lionel Messi）選手の手で南米大陸に戻ってくることを言祝ぐ言説が溢れた。他方で、メッシはじめアルゼンチン代表チームが、愛飲するマテ茶をカタールまで大量に持参したこと、そしてそのマテ茶の産地をめぐり小さな事件が起きたことは、南米南部を除いてほとんど注目されなかった。具体的には、アルゼンチンの元下院議員（ミシオネス州選出）が、「アルゼンチンには多くの優れたメーカーがあるのに、アルゼンチン代表はカタールにウルグアイのメーカーのマテ茶を持っていっている。公式の発表はあるのか？ほとんど挑発のようなものだ。」とツイートした [1]ことが発端となった。これに対し代表チームの広報担当は、ツイッター上でアルゼンチンメーカーのマテ茶が詰まった積荷の写真を見せつつ、「あらゆる好みに合ったものを持参しています。動揺しないでくださいね、みなさん。」と投稿した。もと下院議員のツイートには大量の揶揄コメントが付き、主要紙『クラリン』がわざわざ本件を記事で取り上げるほど話題となった [2]。

上記の事件は、マテ茶をめぐって星の数ほど存在するエピソードのほんの一部に過ぎない。この件を紹介したのは、マテ茶が南米南部の人々にとってきわめてありふれた存在であるのみならず、アイデンティティの重要な一部を成すものであることを示唆するためである。

本研究は、南米南部のメルコスール [3]地域におけるマテ茶産業について、ウルグアイ東方共和国（República Oriental del Uruguay・以下ウルグアイ）に焦点を当てることでその一端を明らかにしようとするものである。ウルグアイは東にブラジル、西にアルゼンチンという南米二大国にちょうど挟まれるように存在する小国である。国土

---

[1] https://twitter.com/luispastori/status/1589695610973982721?s=20（2023年4月28日最終閲覧。以下同じ。）
[2] https://www.clarin.com/deportes/polemica-yerba-mate-seleccion-respuesta-delegacion-critica-ex-diputado_0_SGVdPu06vb.html
[3] Mercado Común del Sur/Mercado Común do Sul・南米南部共同市場。1991年、対外共通関税の設定と域内自由貿易の促進を目的として創設された。

はほぼ平坦で、大部分が草原地帯である。太古から狩猟採集やトウモロコシ栽培に従事する先住民族が居住しており、これに 16 世紀以降ヨーロッパ人植民者が加わり、ウルグアイ人の民族的基礎が形成された。現在は豊かな水資源を背景に、牧畜や林業が盛んである。なお、ウルグアイは 2021 年に日本との修好 100 周年を迎えた。

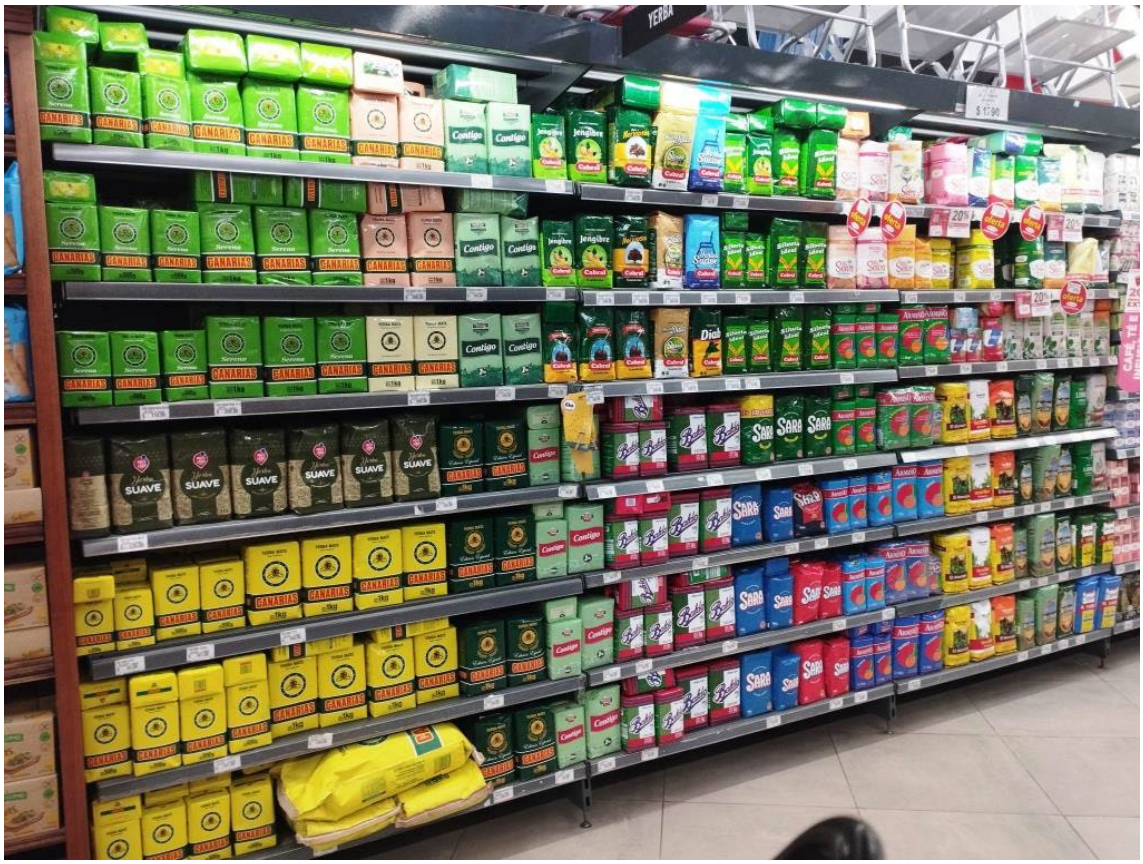
マテ茶（yerba mate（スペイン語）・erva mate（ポルトガル語）。シマロン cimarrón（西）、シマホン chimarrão（葡）とも）は、アメリカ大陸に幅広く分布するモチノキのひとつ *Ilex paraguariensis*[4]を原料とする伝統的な飲料である。先コロンブス期の古くから南米先住民族の人々が飲用していたものがヨーロッパ人征服者たちに伝わり、植民地期に形成された商品流通網を通じて南米各地に伝播した。現在マテ茶の飲用習慣はメルコスールを構成するウルグアイ、パラグアイ、アルゼンチン、ブラジルを中心に幅広く見られる文化である。

ウルグアイ人は、世界で最も多くのマテ茶を消費する国民である。コロナ禍前の報道では、ウルグアイにおける年間一人当たりマテ茶消費量は 9 キロで、南米マテ茶文化圏で最も多い[5]。ウルグアイでは、葉摘をして乾燥させ、細かく砕いたジェルバ（茶葉）を熱湯で漉し、ボンジージャと呼ばれるストローで啜るようにして飲む方法が広く普及している。茶葉を入れる容器をマテ（mate）という。語源は、南米先住民族の言語ケチュア語で「ひょうたん（でできた容器）」を意味する語に由来するとの説や[6]、メキシコ先住民族の言語ナウァトル語で「水を入れる容器」を意味する語が源であるとの説[7]が唱えられている。ウルグアイの街中では、このマテにボンジージャ、そしてテルモ（魔法瓶）を脇に抱えて歩く老若男女の姿がごくありふれた光景になっている。ウルグアイ人とマテ茶の結びつきはことのほか強固で、「（お互いによく似た）ウルグアイ人とアルゼンチン人を見分けるにはどうしたらいいか、簡単だ。いつもマテにボンジージャ、テルモと一緒なのがウルグアイ人だ。」というよく知られたジョークが存在するほどである[8]。

【写真】マテとボンジージャ（筆者撮影）

---

[4] 1816～1822 年にかけて南米大陸を踏査したフランス人植物学者オーギュスト・サンティレル（Auguste de Saint-Hilaire）により命名された。
[5] 現地『ラ・ディアリア』紙、2018 年 3 月 31 日付 （https://ladiaria.com.uy/articulo/2018/3/el-sueno-de-la-yerba-propia/）
[6] Academia Nacional de Letras 2011: 359
[7] Ricca 2005: 106-107.
[8] 例えば、アルゼンチン人喜劇俳優のカプソト（Diego Capusotto）がウルグアイ人秘



【写真】スーパーの棚一角を埋めるマテ茶。首都モンテビデオで筆者撮影。2023 年 2 月 21 日。】

他方、大消費地であるウルグアイは自国内でマテ茶を生産しておらず、周辺国、とりわけ陸路で国境を接するブラジル南部諸州からの輸入に強く依存している。また、ウルグアイにおけるマテ茶に関する人文社会科学的研究はさほど多くない。ウルグアイが自国でマテ茶を生産せず輸入に頼る理由は何か。なぜ文化的に親近性が高く同じスペイン語圏に属するアルゼンチンからでなくポルトガル語圏のブラジルから輸入しているのか。現在ウルグアイ人が消費するマテ茶はブラジルのどこでどのように生産され、どのような経路でウルグアイに輸出されて国内市場で流通しているのか。本研究は、マテ茶を消費する側であるウルグアイに着目し、消費者側の視点を導入することでこれまでのマテ茶研究の欠落を埋めるものである。本研究を通じウルグアイにおけるマテ茶文化の一側面が明らかになり、嗜好品研究の蓄積を厚くすることに貢献すると期待される。

密エージェントを演じた作品中に、「秘密エージェントがアルゼンチン人とウルグアイ人の違いを理解させてくれる」というスキットがあり、マテ茶が登場する（”Agente secreto ayuda a entender diferencias entre argentinos y uruguayos”(https://www.youtube.com/watch?v=ryV0BPFDwuc&t=276s, 2)）。

2. 研究方法

本研究は、構想・予備調査、国内における事前調査、ウルグアイにおける現地調査の三段階で構成される。以下、段階および研究の方法ごとに順を追って述べる。

2-1. 構想・予備調査（2019 年後半～2020 年初）

まず、マテ茶について、研究分野や国、時代を限定することなく、図書館や資料館、オンライン・データベース等を利用し、主として日本語、英語、スペイン語、ポルトガル語の先行研究を可能な限り幅広く収集した。また、2019 年 9 月および 2020 年 1 月にウルグアイを訪問し、現地で出版されている主要な参考文献を入手した。さらに、内外の研究者らと意見交換を行い、調査への協力をとりつけた。

2-2. 国内における事前調査（2020～2022 年度）

本研究の計画は、当初、2020 年度に実施する予定で設計されていた。しかし、コロナ禍によってウルグアイへの渡航が不可能となったため、2020 および 2021 年の二カ年度にわたり研究を延期せざるを得なかった。コロナ禍で活動に大きな制約がかかった期間を含め、国内では、構想・予備調査段階で収集済であった文献を検討した。また、研究の構想段階以降に発表された関連研究をフォローした。さらに、インターネットを使用してウルグアイを中心に南米南部のマテ茶産業の状況をモニタリングした。加えて、ウェブサイトや Facebook 等、インターネット上で広報を行っているマテ茶輸入会社複数をフォローし、電子メールによりインタビュー依頼を行った。

2-3. ウルグアイにおける現地調査（2022 年度末）

ウルグアイ現地における調査は 2023 年 2 月 20 日から 3 月 20 日かけて実施した。データ収集の方法は、①ライブラリーワーク、②フィールドワーク、③インタビュー、そして④その他の四つで構成される。

①ライブラリーワーク

ライブラリーワークでは、主としてマテ茶の貿易データを収集した。ウルグアイは、1830 年の独立からおよそ半世紀後の 1884 年から『共和国年次統計』（Anuario Estadístico de la República Oriental del Uruguay）を刊行しており、いくつかの例外を除き貿易データを継続して掲載している。インターネット上では 2000 年以降のもののみ利用可能であるため、それ以前は紙媒体に拠ってデータを収集した。訪問先機関は以下のとおりで、所在地はすべて首都モンテビデオである。

・ウルグアイ共和国大学（Universidad de la República, UDELAR）経済経営学部

（Facultad de Ciencias Económicas y de Administración: FCEA）付属図書館 [9]

・同　社会科学部（Facultad de Ciencias Sociales: FCS）図書館

・同　人文教育学部（Facultad de Humanidades y de Ciencias de Educación: FHCE）図書館

・ラテンアメリカ統合連合（Asociación Latinoamericana de Integración: ALADI）図書室 [10]

・ウルグアイ国立図書館（Biblioteca Nacional del Uruguay）

②フィールドワーク

フィールドワークは、ウルグアイ東部のトレインタ・イ・トレス県（Departamento de Treinta y Tres）で実施した。同県では、政府が指定する自然保護区の一つであるケブラダ・デ・ロス・クエルボス（「カラス [11]渓谷」の意）公園内に自生するマテ茶の原木を撮影した。同保護区への入園にあたり、もとウルグアイ農牧水産省（Ministerio de Ganadería, Agropecuaria y Pesca: MGAP）職員で現地においてガイドを務めるパブロ・コスタ（Pablo Costa）氏の同行を得、同氏からケブラダ・デ・ロス・クエルボス公園の環境特性と自生するマテ茶の原木との関係、同公園内におけるマテ茶生産の可能性、ウルグアイにおける環境・食料問題の現状と政策面での課題等について聴取した。

③インタビュー

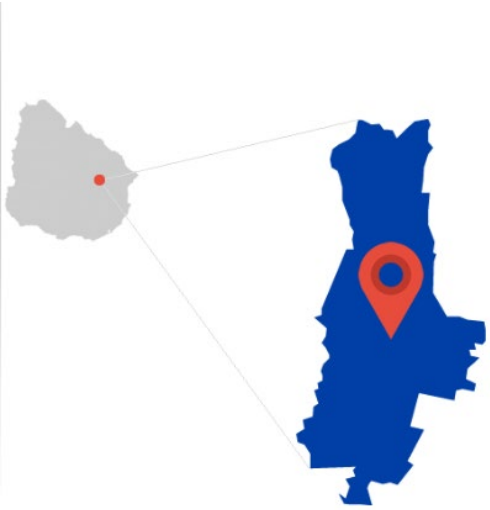
インタビューは、事前に電子メールにより面談の依頼をしたマテ茶輸入会社のうち、返答があったラ・セルバ社（Instituto Botánico La Selva S.A.）に対して行った。2023 年 3 月 15 日、モンテビデオの中心部からやや離れた場所にある同社の工場兼オフィスを訪問し、同社ゼネラルマネージャーのマリアノ・マルティネス氏（Cr. Mariano Martínez）および広報担当のシルバナ・カストロ氏（Silvana Castro）から、ラ・セルバ社の歴史と事業内容、ウルグアイにおけるマテ茶の輸入・流通・消費の現況と今後の展望等について聴取した。また、操業中の工場において、茶葉の搬入から精製、袋詰めの過程を実見し写真・動画で記録した。

---

[9] 同図書館における調査にあたり、主任司書リタ・グリソリア氏（Lic. Rita Grisolia）から多大な協力を得た。

[10] 同図書室における調査にあたり、司書のシルバナ・アステジアンテ氏（Lic. Silvana Asteggiante）から多大な協力を得た。

[11] 保護区の名称には「カラス」とあるが、実際に生息しているのはカラスではなくコンドルの一種である。



【地図】トレインタ・イ・トレス県およびケブラダ・デ・ロス・クエルボスの位置 [12]

④その他

その他、関連する映像資料を視聴してデータを収集した。具体的には、2021年に制作された映画作品『マテイン』（Pablo Abdala, Joaquín Peñagaricano監督。ウルグアイ・ブラジル・アルゼンチン合作。原題 MATEÍNA）を、現地において映像配信サービスに加入して視聴した。タイトルにある「マテイン」とは、化学的にはカフェインと同じものとされるが、マテ茶が含む独自の物質であると広く信じられているものを指す。2045年の未来のウルグアイを舞台とし、マテ茶が禁制品となった同国で二人の主人公が隣国パラグアイに潜入し、マテ茶を密かにウルグアイに持ち帰ろうとする、という設定のロードムービー風コメディ映画である。

また、モンテビデオの書店、古書店を訪問し、新たに刊行された文献や、構想・予備調査段階で漏れがあったものを収集した。

【画像】映画『マテイン』ポスター（作品公式Twitter アカウントより [13]）

---

[12] 出典：Google Map およびウルグアイ環境省ホームページ（https://www.ambiente.gub.uy/oan/snap/quebrada-de-los-cuervos-y-sierras-del-yerbal/）

[13] https://twitter.com/MateinaLa/header_photo

3. 研究成果

3-1. マテ茶の歴史

「嗜好品」（shikohin）は日本語のボキャブラリーのなかから登場した用語であり（高田 2008: 3-4 [14]）、本研究が対象とするスペイン語・ポルトガル語圏の語彙から「嗜好品」に対応するカテゴリを端的に表す語を探すことは容易ではない。他方で、マテ茶という物品は、その「存在の様式」（高田 2004: 241）ならびにそこに至るまでの過程において、典型的な嗜好品であることが確認できた。

人類によるマテ茶消費が文献で確認できるのは、およそ 16 世紀半ばのことで、南米大陸にやってきたヨーロッパ人征服者たちが先住民族グアラニ（Guaraní）と接触したことをきっかけとする。征服者たちが現在のパラグアイ・アルゼンチン・ブラジル国境地帯で遭遇した先住民族は、“Ca’á”と呼ばれる、健康をもたらすとされる聖なる木の葉を噛み、また今日と同様に乾燥させた葉を水で漉して飲む習慣を有していた。さいしょ、マテ茶が栄養補給の手段として、また医薬品として使用されており、さらに儀礼の対象ともなっていたことが窺える（Assunçao 1967: 28-29; Ricca 2005: 14）。

マテ茶は南米大陸に形成された植民地社会で大流行する。南米南部に侵入した征服者たちは各地に都市を建設して定住し、また平原（パンパ）には牛馬や羊が持ち込まれ、豊富な水資源と天然の牧草を利用して牧畜が営まれた。マテ茶は先住民族から征服者へ、そしてクレオール（現地生まれのヨーロッパ系住民）へと浸透し、特に農村の過酷な環境で生きるガウチョ（牧童。gaucho（西）, gaúcho（葡））に愛された。17 世紀以降はイエズス会士が設立した先住民教化集落（ミッション、レドゥクシオン）において組織的な生産も行われ、商品作物として南米全域で流通した [15]。

マテ茶消費は18世紀後半以降、ヨーロッパの流行に敏感なリマ（現ペルーの首都）などの大都市では衰退するものの、バンダ・オリエンタル [16]では老若男女や身分を問わず親しまれ続けた（Assunçao 2001: 88; Garavaglia 2008: 71, 92-97）。バンダ・オ

---

[14] なお、国立国会図書館デジタルコレクション（https://dl.ndl.go.jp/）によれば、「嗜好品」の用例は既に明治初期から見いだせる。

[15] マテ茶があくまでローカルな嗜好品にとどまった理由について、Folch (2010)は、植民地時代にマテ茶の産地を領有していたスペイン王室がマテ茶を課税の対象としか考えておらず、領外、とりわけ重要市場であるヨーロッパで流通させようという発想を持たなかった点を指摘する。この点が、グローバルな商品である紅茶やコーヒーなど他の植物由来の嗜好品との大きな違いである。

[16] 独立前のウルグアイの呼称。ウルグアイ河東岸一帯を指す。

リエンタルが紆余曲折を経てウルグアイ東方共和国として成立（独立宣言 1828 年、憲法制定 1830 年）してからも、この地の人々は変わらずマテ茶を消費し続けた。『共和国年次統計』1882 年版によれば、同年、ウルグアイはおよそ 6,252 トンのマテ茶を輸入しており、マテ茶の輸入額は輸入総額の 4 パーセントを占めた。当時の人口は 50 万 5,000 人程度と推定され、単純に割ると一人当たり 12 キロのマテ茶を輸入していた計算になる。

【画像】絵画に描かれたガウチョとマテ茶（フアン・マヌエル・ブラネス（Juan Manuel Blanes）作、1881 年、ウルグアイ国立美術館蔵。https://acervo.mnav.gub.uy/obras.php?q=ni:1094）

3-2. 社交の道具としてのマテ茶

マテ茶は、植民地時代を通じ、嗜好品の存在形態を帯びるとともに、こんにちに受け継がれるような社交の道具としての側面を獲得していったと推測される。

マテ茶は伝統的に回し飲みされることで知られ、その際に独特の作法が存在する点が注目される。外部の観察者たちは早くからマテ茶飲用に際してのさまざまなジェスチャーに着目していた。例えば、1916 年、汎米連合（Pan American Union）は会報においてマテ茶を取り上げ、そのなかで回し飲みの習慣を紹介している。すなわち、マテ茶は旅人をもてなす手段として古くから用いられ、まずホスト役は茶を準備して最初の一口を自身で啜る[17]――毒が入っていないことの証になる――。そして客人はホストから渡された同じマテとボンジージャを使用して茶を啜らなくてはならない。すすめられたマテ茶を断る行為は侮辱と受け取られる（Pan American Union 1916: 625-643）。

日本人もマテ茶の作法に関心を抱いていた。1955 年、日本海外協会連合会が前掲の汎米連合によるマテ茶紹介記事を訳出したパンフレットから引用する。

「又マテ茶の入れ方やそれの社交的な用い方にも特別な作法が発達した。例えば客

[17] セルビア人映画監督のエミル・クストリツァ（Emir Kusturica）がウルグアイのもと大統領ホセ・ムヒカ（José Mujica）に迫ったドキュメンタリー映画『世界でいちばん貧しい大統領　愛と闘争の男　ホセ・ムヒカ』（2019 年）は、ムヒカがホストとして自宅で監督にマテ茶をすすめる場面から始まり、コミュニケーションツールとしてのマテ茶文化の一端が窺える。

は【マテ茶を淹れる・引用者注】主婦に対して三杯目か四杯目のマテ茶をもらうまでは決して礼を言わないとか、もうこれ以上要らないという時になつてはじめて礼を言うとかは普通のことである。マテ茶を御馳走になるときの作法は、差し出された【容器の】ひようたんを受け取る時と、それを返す時椅子から立つだけでよいのである。」（日本海外協会連合会 1955: 5、訳文は南坊進策 [18]）

上記引用で指摘される、客人のホスト役に対する礼儀作法は、ウルグアイにおけるマテ茶研究文献でも確認できる。管見の限りウルグアイにおいてもっとも包括的にマテ茶の歴史・文化を調査したハビエル・リカ『マテ茶：先住民文化から現在まで』では、ホストにすすめられたマテ茶を飲んで「ありがとう」と言って返すと「もういらないよ」の意になり、その後マテ茶は回ってこなくなることを、現在の習慣として紹介している（Ricca 2005: 234-235）。

3-3. ウルグアイにおけるマテ茶産業の現在

ことほどさように、数世紀にわたりマテ茶を愛好してきたウルグアイ人であるが、現在、そもそも茶葉がどこからどのように供給されているのか、ウルグアイ人自身が知らない場合もある。ウルグアイは自国でマテ茶を生産せず、隣国のブラジル、アルゼンチンおよびパラグアイからの輸入で需要をまかなってきた。特にブラジルへの依存度がきわめて高く、全体のおよそ 9 割がブラジルの南部諸州（リオ・グランデ・ド・スル、サンタ・カタリナ、パラナ）で生産されたものである。かかるブラジルへの過度の依存も不変の傾向であり、『共和国年次統計』で確認できるかぎりこの 140 年間おおよそ同様であることが分かった。

ウルグアイが自国でマテ茶を生産せず輸入に頼る理由は、一見単純かつ明快である。自国の土地では原木が育たないから、というものである。しかし、今回の調査で、ウルグアイ領内に原木が自生している場所が複数存在することが分かった。その一つであるトレインタ・イ・トレス県の自然保護区ケブラダ・デ・ロス・クエルボス公園では、官民の協力により原木の生育環境を保護し、また栽培へ向けた取り組みを計画している。ただ、同保護区ではエコ・ツーリズム向けの景観保護以外に目立ったプロジェクトは未だ進展していない [19]。

---

[18] 訳者の南坊は農林省（当時）農地局入植課員であった。なお、1959 年には木下桂風が『喫茶の世界』のなかでマテ茶に触れ、同パンフレットを使用してマテ茶の作法に言及している（木下 1959: 116-124）。
[19] パブロ・コスタ氏からの聴取内容に基づく（2023 年 3 月 11 日）。

【写真】マテ茶の原木と葉。トレインタ・イ・トレス県の自然保護区ケブラダ・デ・ロス・クエルボス公園内。2023 年 3 月 11 日筆者撮影。

マテ茶の輸入業者はどのように考えているか[20]。例えば、ウルグアイにおける主要輸入業者ラ・セルバ社は、1910 年創業のハーブ店として 1 世紀超の歴史を有しつつ、マテ茶業界への参入は比較的近年のことで、1990 年代に入ってからであった。現在同社は、カナリアス（CANARIAS）、アルミニョ（ARMIÑO）に次ぐ業界第 3 位の地位にあり、ウルグアイ市場に出回るマテ茶のおよそ 9 パーセントが同社製品である（カナリアス 60 パーセント、アルミニョ 10 パーセント）。同社によれば、ウルグアイ人はブラジルから馬車で茶葉を運んでいた時代の名残で、長い輸送過程でやや黄色味を帯び、苦みを増した濃い味のマテ茶を伝統的に好んできた。現在、ウルグアイ人のおよそ 85 パーセントが少なくとも週に一度、マテ茶を消費しているとされ

[20] 以下、ラ・セルバ社のマリアノ・マルティネス氏およびシルバナ・カストロ氏からの聴取内容に基づく（2023 年 3 月 15 日）。

（Sequeira 2022: 312）、家庭内で親から子――おおよそ 17 歳前後から飲用が習慣化する――へと好みが綿々と受け継がれている。一人当たり年間 9 キロという消費量（前述）の多さから、マテ茶は酒類や清涼飲料水と十分に競争できる嗜好品となっている。なお、マテ茶の価格は業界 1 位のカナリアスがほぼ決定し、価格を吊り上げようと思えばできるが、社会的コミットメントの観点から消費者の負担にならない程度の価格 [21]を維持している。

【画像】ラ・セルバ社のロゴ [22] および本社工場兼オフィス外観（Google Map より）

マテ茶の茶葉は細かく砕いた葉（hoja）と茎（palo）、そして茶葉の粉（polvo）で構成され、この三要素の配合率がマテ茶文化圏主要四か国で全て異なる。ウルグアイ人はアルゼンチン人、パラグアイ人が飲むマテ茶は味が薄すぎると評価しており、両国産のマテ茶を好まない。むろん、隣の大国アルゼンチンがウルグアイ人の好みに合わせた配合でマテ茶を生産することは技術的には可能であるが、アルゼンチン人はアルゼンチン人で自分たちのこだわりがあり、また貿易について保護主義的な方針をとっている [23]ため、ウルグアイ市場への供給に関心がない。結果として、昔ながらのやり方でマテ茶を供給してくれるブラジルへの依存が続いているのである。ウルグアイ領内に原木が自生しており、マテ茶の自国生産促進を目指す超党派の議員グループ

---

[21] 筆者が現地で商店を回り確認した限りでは、1 キロのパッケージでおおよそ 500～600 円のものが大半であった。近年のインフレ傾向に鑑みると、相対的に低い価格に抑えられているという印象である。
[22] https://www.laselva.com.uy/
[23] マテ茶文化圏主要四か国はメルコスール原加盟国でもあり、関税同盟としてメルコスール域内は無関税で貿易を行うのが原則である。ただし、さまざまな例外規則があるほか、税関当局が現場で手数料を徴収するなど、実質的な関税がかけられる事態もしばしば生じる。

ができたこと[24]も承知してはいる。自国生産が実現すればラ・セルバ社としても買い付けにやぶさかではない。しかし、現状ではマテ茶の地産地消はアイデアの段階にとどまっている。

4. 結論および考察

以上、本研究では、主としてライブラリーワーク、フィールドワーク、インタビューの手法により、ウルグアイに焦点を当てて南米南部におけるマテ茶の歴史や社会的位置づけ、マテ茶産業の現在について、その一端を明らかにしてきた。

浮かび上がってきたのは、ウルグアイにおけるマテ茶消費の息の長さである。ウルグアイの職業歴史研究者が言うごとく、マテ茶は常にオリエンタレス（東方人。ウルグアイ人の別称。）とともにあった[25]。マテ茶が禁制品となったウルグアイという架空の未来を描いた映画『マテイン』では、軍民独裁時代（1973～1985 年）を想起させる抑圧体制下でマテ茶を求める登場人物の必死な表情が微笑を誘う。現実のウルグアイはといえば、コロナ禍の影響で、感染予防のため回し飲みの頻度が減り、消費の個人化が進行した[26]とはいえ、消費自体は相変わらず旺盛である。年間一人当たり 10 キロ前後のマテ茶を消費する傾向は、少なくともこの 140 年間変わっていない。

社交の道具としての側面や、元来の味へのこだわりも印象的である。マテ茶をめぐる独特の作法が現在も健在であり、また、言語・歴史・文化の面で数多くの共通点を有するアルゼンチン人の好みとの差異が強調される。かつてスペイン植民地の辺境であったウルグアイは、マテ茶文化圏のなかでも特に古い消費形態をいまに受け継ぐ例として特筆できる。他方で、これほどアイデンティティの重要な一角を成す物品をブラジルからの輸入に完全に依存している現状について、食料主権の観点から見直そうとする動きはまだ始まったばかりである。「マテ茶国産化構想」は注視し続けるべきテーマとなろう。

最後に、本研究の限界と今後の課題を述べる。まず、資金と時間面での限界により、ブラジルにおけるマテ茶の生産過程を調査するまでに至らなかった。また、研究計画の立案当初、マテ茶をめぐる南米南部の政治力学を描くことを想定していたものの、アルゼンチンの保護主義の影響をおぼろげに看取したのみで、ブラジル側の動きについては手つかずとなった。さらに、マテ茶の南米以外への広がり（錦田 2013）も今後の課題である。加えて、明治以降の日本とマテ茶とのかかわりについて、近年

---

[24] “PLANTACIÓN DE YERBA MATE” （ウルグアイ下院ウェブサイト、http://www.diputados.gub.uy/noticias/plantacion-de-yerba-mate/）

[25] カルロス・デマシ（Carlos Demasi。もと共和国大学人文教育科学部）へのインタビュー。2023 年 3 月 17 日。

[26] ラ・セルバ社からの聴取内容に基づく（2023 年 3 月 15 日）。

注目される入植者植民地主義論、あるいはセトラー・コロニアリズム論といわれる研究潮流 [27]のなかで捉え返す作業も射程に入ってこよう。

今回得られた成果をもとに、今後さらに調査を深めていきたい。

5. 引用文献

東栄一郎 (2022).『帝国のフロンティアを求めて：日本人の環太平洋移動と入植者植民地主義』飯島真理子ほか訳、名古屋大学出版会。(原著 2019)

Academia Nacional de Letras (2011), *Diccionario del español del Uruguay*, Montevideo: Ediciones de la Banda Oriental.

Assunçao, F (1967). *El mate*, Montevideo: Arca.

Assunçao, F (2001). *El mate/The Mate(Bilingual edition)*, Punta del Este: Mar y Sol ediciones.

Azuma, E (2019). *In Search of Our Frontier: Japanese America and Settler Colonialism in the Construction of Japan's Borderless Empire*, Oakland: University of California Press.

Folch, C. (2010). "Stimulating Consumption: Yerba Mate Myths, Markets, and Meanings from Conquest to Present". *Comparative Studies in Society and History*, 52(1), 6–36. doi:10.1017/S0010417509990314

Garavaglia, J C. (2008). *Mercado interno y economía colonial: tres siglos de historia de la yerba mate*, Rosario: Ediciones Prohistoria.

木下桂風(1959). 『喫茶の世界』小壷天書房。

日本海外協会連合会 (1955). 『マテ茶』南坊進策訳、日本海外協会連合会。

錦田愛子(2013). 「マテ茶を飲む人々」黒木英充編著『シリア・レバノンを知るための 64 章』明石書店。

Pan American Union (1916). *Bulletin of the Pan American Union*, 42(5). https://ia801908.us.archive.org/27/items/sim_bulletin-of-the-pan-american-union_1916-05_42_5/sim_bulletin-of-the-pan-american-union_1916-05_42_5.pdf

Ricca, J M (2005). *El Mate, los secretos de la infusión. Desde la cultura nativa hasta nuestros días*. Tercera edición, Montevideo: Mendrugo.

Sequeira, A(2022). *Hierbas medicinales y aromáticas en Uruguay*. Tercera edición actualizada y ampliada, Montevideo: Ediciones de La Plata

高田公理(2004).「終章　嗜好品の比較文化」高田公理・栗田靖之・ＣＤＩ編『嗜好品の文化人類学』講談社、235-254.

---

[27] たとえば、Azuma (2019)および東（2022）を参照。

高田公理(2008).「序章　嗜好品文化研究への招待」高田公理・嗜好品文化研究会編『嗜好品文化を学ぶ人のために』世界思想社、1-14.

一次資料
『共和国年次統計』(República Oriental del Uruguay, Anuario Estadístico de la República Oriental del Uruguay, Montevideo)

謝辞

筆者は、2019 年後半に本研究計画を策定し、2020 年度の本件助成に採択された。コロナ禍により予定していた海外渡航が事実上不可能になり、実際に研究を遂行したのは 2022 年になってからである。本報告書は、海外を対象とする研究者がコロナ禍において直面した問題とそれへの対処についての記録でもある。

率直に述べて、研究計画の遂行にはさまざまな艱難辛苦がつきまとった。渡航制限は無論、国内でも緊急事態宣言等で外出自粛が重くのしかかった。対面でのインタビュー調査や、図書館等に赴いての文献研究に足かせが嵌められ、また人的ネットワークの構築に著しい困難が生じた [28]。こうした困難にもかかわらず、最終的に本報告をまとめることができたのは、ひとえに内外の多くの方たちから支援を得られたおかげである。

まずなによりも、2 カ年度という長期にわたる延期を寛大に認めてくださった（公財）たばこ総合研究センター（TASC）に深甚な感謝を申し上げたい。また、本件の構想段階から常に重要な示唆をくださっている内田みどり（和歌山大学教授）、推薦人になってくださった大越翼（京都外国語大学教授・同ラテンアメリカ研究所所長）、現地での面会のためにと推薦状を寄せてくださった田中径子（元駐ウルグアイ大使）、貴重なご意見をくださった TASC 研究審議員の先生方、アドミニ面でご支援くださった TASC の方々、立命館大学衣笠リサーチオフィスのスタッフの方々、ありがとうございました。

また、ウルグアイ現地では、報告書本文で言及した方々からさまざまな協力を得た。本文では触れていないが、加藤雅史・アイチウルグアイ社（Aichi Uruguay S.A.）社長、在ウルグアイ日本大使館はじめ南米の在外公館の方たちからも支援を頂戴した。記して感謝を申し上げる。

---

[28] 特に、嗜好品文化研究会に対面で参加することが叶わないまま、同会が 2020 年度をもって活動休止となったこと、同様に日本マテ茶協会が対面・公開での活動を休止したことが大きな痛手となった。研究者にとり、非公式なかたちでのネットワーク形成が極めて重要であることを身をもって痛感した次第である。

Mi profundo y sincero agradecimiento a toda/os aquella/os que me han brindado generoso apoyo para mi pesquisa. Sin su aporte este trabajo no hubiera sido posible.

6. 英文アブストラクト

Yerba Mate Consumption in Uruguay

Tomofumi Nakazawa (Ritsumeikan University)

This article is a report of an investigation on the Yerba Mate (infusion of *Ilex Paraguariensis*) consumption in the Oriental Republic of Uruguay. Originated from the millennial indigenous use, Yerba Mate is a shared culture in the South American Mercosur (Mercado Común del Sur/Mercado Común do Sul) countries: Argentina, Brazil, Paraguay and Uruguay. Amongst the original member states of the Mercosur, Uruguay, smallest in terms of surface and population, is the largest consumer of the Yerba per capita (9kgs annually) and yet highly dependent on the imports from Brazilian production (almost 90%).

Based on previous survey and field research, as well as library work and interviews in Uruguay conducted during February to March 2023, the author describes an abundant history and socio-cultural aspects of Yerba Mate drinking behavior amongst “Orientales” (old nomination of Uruguayan people). The report also shows that at least since the end of the 19th century Uruguay has continued importation from neighboring states of southern Brazil where provides the Yerba matching the taste of Uruguayan consumers. On the other hand, Argentina, another neighboring Yerba-producer, has never been a major supplier of its own Yerba to Uruguay, due to the lack of interests to reach the Uruguayan market as a consequence of its protectionism.

Besides the lasting dependency on Brazil and the historical attachment to its own taste, the article tries to suggest a possibility of self-production of the Yerba Mate in the Uruguayan territory. It is certain the existence of autochthonous *Ilex Paraguariensis* trees in some areas and there are civil/local movements towards industrialization of the Yerba. Although in terms of real politics it is yet to be concreted, the idea of autonomous Yerba production and consumption is an interesting step from the perspective of food sovereignty.